

(7) 豪州の小麦生産流通事情 - 平均単収は適地でも150kg -

オーストラリアでは、例年約1,000万haの小麦ほ場があり、約1,500万tの生産量があります。したがって、適地であっても、10a当たりの平均収量は150kg（北海道の平年は約400kg）です。州により生産性は異なっておりますが、西オーストラリア州（110）＜南オーストラリア州（130）＜クィーンズランド州（150）＜ニューサウスウェルズ州（160）＜ビクトリア州（180）の順で収量が多く、灌漑による栽培や、溜め池などを作って、土壤水分をある程度補給できる地域では、10a当たり300kgを越えるほ場もあります（写真-1参照）。

しかし、西オーストラリア州などでは、年間雨量が200～400mmで、出穂期以降は雨が降らず、常に干ばつ状態で経過するため、葉が巻きあがった状態で生育しています。このような地域では、10a当たり50～100kg程度の収量です（写真-2参照）。

このように、オーストラリアでは、収量の制限因子として、水分が重要な役割を担っています。また、低収要因の一つに化学肥料の施用が少ないことや、農業による防除があまり行われていないことなどもあげられます。

オーストラリアでは、化学肥料や農薬の製造工場がなく、輸入品に依存しているため、化学肥料は一部リン酸肥料を使う程度で、他の化学肥料はほとんど使われない生産者が多いのです。地力は、輪作で維持されており、まめ科作物2年（チックピー、ファバビーン、ルーピン）→めん羊等家畜の放牧2年→麦類2年（小麦、大麦・えん麦）というのが一般的な輪作体系で、麦類は放牧した後地に作付されることが多いようです。

病害虫の防除は、ほとんど行われておりませんが、主要な病害はさび病類で、これには世界でもトップクラスの研究者がおり、品種改良が進んで、耐病性品種が育成・普及しているために無防除でもよいのです。

私が平成2年（1990）に訪れた西オーストラリア州の、小麦を1千ha程度を作付していたヘンダーソン農場では、麦類の作付比率が高いため、窒素を3kg、りん酸を10kg/10a施用していましたが、一般には無肥料が多いよ

うです。病虫害の防除は行われず、防除機は、は種前に多年生イネ科雑草防除の除草剤を散布するためにあるといっていました。また、機械、施設の投資が少なく、小麦専用農業機械というものはなく、播幅12mのドリル施肥・播種機1台（グラビア写真、1日24時間稼働で200haは種）、コンバイン（ヘッター）1台（6週間で1,500ha収穫）のほか、230PSの4輪駆動と70PSのトラクタ、散布幅18mの防除機を所有、しかも設備投資の大きい乾燥施設は、降雨がないので不要なのです。北海道ではコンバイン1台当たりの収穫面積が、50～60haですから、コンバインの台数では約1／20以下ですみ、乾燥は施設、燃料も不要で、ha当たりの生産コストは5～6千円と、北海道の1／100程度と低コストで生産できるのです。

一方、流通は小麦庁が掌握し、作付指導、買い付け、品質検定・格付け・管理・研究・各種調査まで行っています。また、90%が輸出用のため、ニーズにあった小麦を生産するための研究が、極めて合理的・徹底的に各州で行われています。

<佐藤 久泰>



西オーストラリア州のやや土壌水分が維持されている小麦ほ場

写真-1



西オーストラリア州の干ばつほ場

写真-2